

福沢研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第18号 2013年3月31日 発行

目次

*自我作古の人と思想(所長 岩谷十郎) ……………	2	*『慶應義塾150年史資料集 第1巻』刊行にあたって ……	7
*宿帳にみる三笠ホテル小史(横山寛) ……………	3	*新収資料紹介・主な動き……………	8・9
*明治期中等教員の軌跡(柄越祥子) ……………	4	*研究活動ニュース……………	10
*田端重晟関係史料について(堀和孝) ……………	5	*センター諸記録……………	11
*福沢研究センター講座を受講して(重田勇) ……………	6	*スタッフ一覧……………	12



明治中頃 旧島原藩邸黒門



大正初期 完成間もない"幻の門"



現在の"幻の門"

"幻の門" 完成100年

慶應義塾の顔として長らく愛されてきた風景といえば、まず“幻の門”越しに図書館旧館の八角塔を望む景色に指を屈することができるのではないだろうか。この門が建設されて、今夏でちょうど100年になる。

明治4年に三田に移転した義塾は、既存の旧島原藩邸黒門をそのまま表門(正門)として使用していた。三田通りから坂道を上った正面の木造門の奥には、義塾最初の赤煉瓦建築である旧塾監局がのぞいていた。この門が明治の末にはさすがに老朽化、さらに明治45年には、門のすぐ後ろに赤煉瓦の瀟洒な図書館が完成したので、それに合わせて翌年夏休み中に改築されたのが「幻の門」と呼ばれるようになる簡素な石造・鉄扉の門である。もともと図書館とセットなのだ。

なぜ「幻の門」なのか。俗に「慶應義塾」という看板がかかっていないからともいわれるが、昭和8年完成の応援歌「幻の門」を作詞した、この名称の生みの親、堀口大学によれば、東大の赤門などのように、どの大学にも立派な門があるのに比べ、福沢以来、権威的、虚飾的と思われるものを極度に嫌う義塾にはそれに相当するものがない。しかし義塾の精神へのあこがれであたかも無形の門が厳然とそびえているかのようだ、という思いを込めたのだという。

この門は、学徒出陣の学生が、挙手の礼で教職員・在校生に見送られた舞台として塾史上に記憶される。戦争末期には中央側の二本の門柱が根元から切断されていた(10頁参照)。戦後の学生運動の頃には落書きビラ貼りの憂き目に遭い、有刺鉄線絡まるバリケードにもなり、今では形を変えモニュメントとして塾監局前の坂道に残されている。かつての位置に巨大な東館がそびえているのは皮肉だが、“幻の門”の姿は、福沢諭吉の思想が、その没後どのように継承され、具現化されたかを考える上で興味深い。(都倉)

自我作古の人と思想

—センター長就任の言葉にかえて—

福沢研究センター所長 岩谷十郎

今日、慶應義塾の起源を安政5（1858）年の築地鉄砲洲の中津藩奥平家中屋敷に開かれた蘭学塾に求めることに異論はない。2008年に150年を迎えた慶應義塾は、まさにそこに“始まり”を持つものとして理解されている。

慶應4（1868）年、芝新銭座に移されたその学塾は、それまで定まった名称なく蘭学所や福沢塾などと呼ばれていたが、この時から“（仮に）慶應義塾”の名が冠された。ふつう命名により物事は“始まる”ものと考ええるが、慶應義塾には“命名”と“始まり”が一致していない。慶應義塾には“始まり”が二つあると考えることも出来よう。

福沢の当時の書簡を見ると、最初の時、つまり築地鉄砲洲に藩命に従って開塾した時、福沢はせいぜい三、四年ほどの付き合いに終わろうとの力の抜き方であった。ところが、その翌年から福沢は英語を学び始め、その後、万延、文久、慶應に亘る七年間に三度に及ぶ洋行を体験する。つまり芝新銭座に移る頃、すなわち二番目の“始まり”の時には、福沢には最初の時とは打って変わって本腰を入れた学塾経営の揺るぎない志が備わっていたのであろう。その証左が、福沢の手による「慶應義塾之記」（慶應4年4月）である。

「慶應義塾之記」は、「福沢と志を同じくするものたちが、封建の束縛から自立し、洋学講究の組織をつくり、教育の場を公開して、近代的な学校づくりの開始を宣言した、いわば『慶應義塾の独立宣言』である」と理解されている（佐志傳「会社、同社そして社中」『近代日本研究』第1巻）。また上述したように最初に「慶應義塾」の名乗りをあげた設立宣言文書であった。

だとすれば、名実ともにこの芝新銭座時代にこそ、慶應義塾の起源が求められてもよからう。あえて述べれば、その二つの“始まり”は、築地鉄砲洲時代の藩命による開塾という受動性＝所与性と、芝新銭座時代の制度理念や思想性を伴った学塾の主体的形成という能動性＝創造性との対比として把握できよう。そしてこの主体性の連続的意識の上に現在の慶應義塾が位置付けられてくる。

ところで「慶應義塾之記」には「自我作古」という言葉が現れる。これは「我より古をなす」と読み下し、もとは漢古籍『宋史』に遡るが、これから自分がしようとす前人未到の新しいことを、予想される試練や困難に耐えて開拓するという、勇気と使命感とを伝える言葉と理解されている（『慶應義塾豆百科』）。

「慶應義塾之記」で福沢は、前野良沢、桂川甫周、杉田玄白などの蘭学者の名を引き、西洋（医）学の我が国への受容に際しての、昼夜寝食をも忘れた彼らの労苦に思いを馳せる。福沢はこれを「自我作古の業」と記した。だがこの表現は杉田玄白の『蘭学事始』にすでに見出せる。杉田は明和年間に進められたオランダ解剖医学書の

翻訳過程を、なによりも「われより古をなすこと」と記していた。福沢は杉田の表現を再引用する形で、慶應義塾の“起源”を日本における蘭学＝洋学の系譜の上に位置づけたのである。

物事の“始まり”とはそれ以前のものを“古い”ものとして、その古いものにはもはや見られなくなった差異、すなわち“新しさ”の創出・発見にある。

考えてみれば、慶應義塾の“私塾”性＝“在野”性の一端は、幕藩体制の身分制度の枠外に成立した私塾に繋がるものがある。大分県日田の咸宜園を例に引けば、広瀬淡窓によるこの漢学塾は、入塾者から「年齢（長幼の別）・修學歷・家格」の別を奪い（三奪）、その代わりに、彼らに「在塾期間の長短・修得課程の多寡・成績順位」といった、塾内規準に基づく新しい別を与えた（三与）。塾生相互の学問的競争、上級者から下級者に対する「半学半教」、さらに塾生による塾内自治の制。まさに封建時代にありながらその束縛から自立した空間がそこにあった（天野郁夫『試験の社会史』）。

この意味では緒方洪庵の適々斎塾も変わりはない。しかもそれは漢学ならぬオランダ語といった異質な言語による異質な西欧文明・文化を扱っていた学問集団ゆえに、その私塾としてのアウトサイダー性は抜きん出ている。そのあたりの状況は『福翁自伝』に活写されるが、そこで展開した外国語の学習方法や競争の仕方は旧来の私塾系漢学塾の方法が踏襲され、他ならぬ適塾塾長を務めた福沢自身を介して初期の慶應義塾にも持ち込まれた。それに“義塾”も英国のパブリックスクールを模したものだとすると、“慶應義塾”と名乗るその学校の“始まり”を画す“新しさ”はどこに見出すべきなのだろうか。

最後にもう一度「慶應義塾之記」に戻る。その末尾に福沢は、「後来の吾曹を視ること猶吾曹の先哲を慕うが如きを得ば、豈亦一大快事ならずや」と記す。後続の人々が、今の自分たちが先人を慕うように、自分たちを見てくれたら楽しかろう、というくらいの意味だが、ここには後続者に乗り継がれ追い越されてゆくことを見据えた先覚者の姿が見える。

すなわち「自我作古」とは、自らが創始開拓するとの強い意志と、学塾の目的を目指した歩みの中でやがては越えられてゆく＝古となってゆく自らの存在性を正面から覚悟するという、剛毅な精神の姿を写し取った言葉なのではなかろうか。

だとすれば、継ぐべき“学統”に「自我作古」が組み込まれた学校は、まさしく前例のない“始まり”だったのではないか。そのような学校を端的に表示する名称がにわかには見つからず、創立の年号を用い「仮に慶應義塾と名づけ」た、との事実とそのことが現れ出ていると思われる。

宿帳にみる三笠ホテル小史

福沢研究センター調査員 横山 寛

平成25年3月7日、かつて軽井沢で営業した三笠ホテルと西洋料理の草分け的存在である料理店・中央亭関係の資料計115点が、清家篤塾長立ち会いのもと、磯野不動産株式会社磯野謙蔵氏・磯野計一氏より当センターに寄贈された。パンフレットや各種献立等が多数を占めるなかで、一際目を惹くのが三笠ホテルの宿帳1冊である。縦40cm、横30cm、厚さ5cm、革張りの重厚な装丁を施した宿帳には、営業開始の明治39年から昭和19年までの宿泊者のサインが残り、近衛文麿、乃木希典など多数の著名人の名前が見られる。義塾としても鎌田栄吉塾長をはじめ、ゆかりの深い人物が名を連ねている。以下その歴史を振り返りつつ、宿帳を紹介しよう。

現在では日本を代表する避暑地として知られる軽井沢は、元来中山道の宿場町で維新後衰退していたが、明治19年に英国聖公会の宣教師A・C・ショーと帝国大学文科大学教授J・M・ディクソンがこの地を「発見」、以後夏の避暑地として宣教師や御雇い外国人らが別荘を構えた。宿泊施設も整えられ、27年に軽井沢初の洋式ホテル・万平ホテルが創業、32年には軽井沢ホテルが開業した。

こうしたなか39年に第十五銀行重役などを務めた山本直良が三笠山の麓に開業したのが三笠ホテルである。設計、監督、棟梁のすべてが日本人の手によった木造洋式ホテルで、客室は30(10室は2人室)、定員40名、宿泊料は1等12円、2等8円、3等5円に設定された。万平ホテルは1等8円、軽井沢ホテルは1等7円、つるや旅館などの日本旅館は1～2円だったから、軽井沢で最も高い破格の値段だった。そのため何年たっても黒字にならなかったといわれ、のちに山本自身も「広く公衆と共に軽井沢の地を楽しもうと思ひ道楽半分に建てた」(『軽井沢の発展策』『住宅』第14号)と述べている。40年には日本館が開業、宿泊者も少しずつ増えていった。

軽井沢への避暑客は当初は外国人ばかりだったが、明治42年頃から日本人も増え始める。新聞によれば、この年三笠ホテルに滞在した立憲政友会総裁西園寺公望を首相桂太郎が訪問して予算に関する打ち合わせを行う一幕もあったという。翌年8月4日には渋沢栄一、森村市左衛門、成瀬仁蔵のサインが残る(写真・下から4行目以下にBaron. Y. Shibusawa, I. Morimura, N. Naruseとある)。彼らは女子大学への寄付を募るため、信越地方巡回の旅の端緒についたところで、軽井沢では三笠ホテルに泊まり、この年完成した桂の別荘などを訪れた(『渋沢栄一伝記資料』)。同時期には西園寺も三笠ホテルに滞在して桂を訪問している(『桂太郎発書翰集』)。ところが9日から軽井沢は豪雨に見舞われ、洪水が発生して日本館が流されてしまう。この洪水は『ニューヨークタイムズ』にも“The Mikasa Hotel Destroyed”と報じられた。しかし本館は無事で、西園寺は実業家白岩龍平からの見舞状に「賤寓は幸ニ比較的安全の場処にて続々避難者を引受」としていると返信

している(『西園寺公望伝』)。

このような政治家や実業家の交流は、かつての大磯を彷彿とさせるが、こうした例はまれで、プールやビリヤード場などを完備した同ホテルはむしろ社交の場であった。例えば山本の妻愛子が有島武郎の妹であった関係から、白樺派のサロンとして利用された。有島の日記にも三笠ホテルで夕食をとる様子が登場する。有島の息子らも参加した仮装舞踏会などのパーティーも開かれた(朝吹登水子『私の軽井沢物語』)。洋風別館が完成した大正10年の8月18日には台湾総督田健治郎のサインがあり、午後3時着、10時発とある。この日は満室で、やむなく万平ホテルに移ったのだった。田は翌日三笠ホテルで行われた貴族院議員の晩餐会に出席し、近衛文麿、徳川慶久、細川護立、加藤高明ら13人の参加者との時務を離れた種々の話題は大いに盛り上がり、午後10時半に及んで漸く散会したと日記に書き留めている。

14年12月には明治屋が買収し、株式会社三笠ホテルと改組した。そして翌年には過去最高の宿泊者数が記録されている。そもそもこのホテルは夏季限定の営業であったとされ、宿帳を見ると年間宿泊者の8～9割は7、8月に集中している。大まかに見て創業から大正初期までは年間100人に満たない程度で、その後昭和初期にかけて年間150～300人くらい宿泊客がいたようである。

宿帳のサインは昭和19年8月が最後である(ただし巻末に破いた跡がある)。軽井沢が外国人の強制疎開地に指定された関係で9月に外務省が借り上げ、20年4月に大久保利通遠縁の元ハンガリー公使で以前宿泊した署名も残る大久保利隆が代表に着任し、出張事務所として利用した。終戦後はGHQの接収を経て27年に三笠ハウスとして再開、45年まで営業した。その後軽井沢町に寄贈され、55年国の重要文化財に指定、現在は内部が公開されている。文化庁のデータベースに「改造が僅かで、ほとんどが当初のまま」と紹介されるごとく、幾多の著名人が宿泊した在りし日の姿を現在に伝えている。

この宿帳と同種の資料として、富士屋ホテル、金谷ホテル、奈良ホテル、万平ホテルなどの宿帳の現存が知られ、富士屋ホテルの58冊は箱根町有形文化財に指定されてさえる。現在も営業するこれらのホテルの宿帳に加え、すでに営業を終えた三笠ホテルの宿帳が大切に保存されてきたことは大変喜ばしく意義あることであろう。



明治期中等教員の軌跡

— 木村牧氏関係資料に関して (計138点) —

福沢研究センター研究嘱託 柄 越 祥 子

木村牧(勇次郎)は、万延元(1860)年2月生まれ、『入社帳』の出身藩府県は開拓使管下渡島国となっており、今回寄贈された資料から元々は会津藩士であったことがわかる。「履歴書」によると、明治11(1878)年、青森県の私学東奥義塾を卒業し、そのまま教員兼塾監として勤務、13年8月には青森県南津軽郡公立黒石中学校の主席教員として翌年4月まで勤めている。この公立黒石中学校とは、明治12年頃から青森県の各郡ごとに作られた郡立中学の一つであるが、それらの中学校の実態は県からの補助も低額で、高等小学校とさして変わらないものもあったと言われている¹。14年4月に黒石中学を辞した木村は、同年10月、慶應義塾に入社、15年7月に卒業する。以下、寄贈された資料の辞令等に即してその後の木村の足取りを見ていきたい。

明治17年から22年にかけて、静岡県内の四つの中学の教員を歴任した木村は、22年に帝国大学の特約生教育学科に入学した。この学科は、同年4月から約一年半、帝国大学文科大学内に設けられた中等教員養成課程である²。募集定員は20名を予定していたが、実際の入学者は約10名、転・退学者もあり、4月入学者のうち修了者は木村を含め僅かに5名であった³。特約生は授業料の免除だけでなく、毎月30円以内の給与金を受けたが、卒業後にその額に応じた四段階の服務規程があった。今回の資料の中で特に注目されるのは「特約生給費願」で、これは木村が15円以上20円以下の給費を願い出て、文科大学から15円の給費を告げられたものである。15円以下は4年の服務規程に相当するランクに当たるが、これまで、こうしたランクや給費額がどのように決定されていたのかは明らかでなかったため、木村自身が希望を訴えているこの資料は、そうした経緯を解明する手がかりとなりうる。

この服務規程に従って、23年7月以降、木村は文部省が指定した高等師範学校附属学校へ赴任し、その一年後の24年に島根県尋常中学校へと移った。島根在任期間中の資料には校長兼教諭や「小学校令実施方取締委員」など様々な役職の任命書や、県に宛てて外国人教師を雇うことを進言する原稿などがあり、木村が精力的に多様な教育活動を行っていたことが読み取れる。

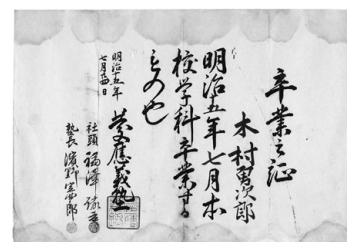
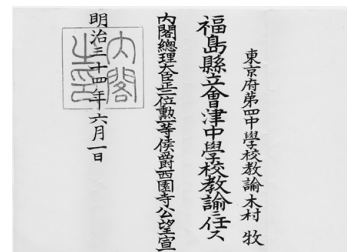
その後、25年から長崎の私立尋常大村中学校の校長兼教員、27年には東京府城北中学校(のち東京府第四中学校と改称)の教員となり、明治34年からは福島県会津中学校、福島県福島中学校、福井県立武生中学校などで勤め、奈良県の中学を経て大正4年から昭和3年まで札幌の北海中学で勤務をした。

当時の中学校教員が全国各地を転々とするのは珍しいことではないが、木村がこのような職歴を重ねた理由の一つが、第四中学校での教え子である横地良吉の書簡から窺える。この書簡には木村自身が語った事として、地方と東京には教育格差があり、教育家たるもの地方に赴いて滞りがちな地方教育に尽くすべきで、自分はその舞台として先ず故郷会津を選んだと記されている。こうした木村の信念は初期の赴任地であった黒石の郡立中学での経験から最終の赴任地である北海中学での経験を通底しているように思われる。また、会津青年会附属図書館を始め、様々な場所から寄附の礼状が届いており、広く社会の問題に目を向け尽力しようとする姿勢の持ち主であったことがわかる。

こうした意識で中等教育に身を投じた人物が、そのステップアップの手段として慶應義塾を通過していたことは興味深い。東奥義塾で英語を学び、慶應義塾、また英語で授業が行われる文科大学の特約生教育学科など、一貫して英語教育に重点をおいて技能の向上を図り、その後も明治36年に国民英学会主催の語学教育の夏期講習に参加するなど継続して努力を続けていた。明治期は有資格中等教員の不足、尋常中学校教員の質の悪さなどがしばしば指摘されるが、この資料群からは、この人物が教員生活を通じて様々な方法で研鑽を積んでいたことが読みとれる。翻ってみれば、そのような人物にとって慶應義塾が果たした役割も見えてくるであろう。

更に、一教員が日本各地に移動する足跡や、各地で担わされた役割や月俸などを追っていくことが出来るため、この時期の中等教員の地位についても一つの形を示しており、明治期中等教員史にとって非常に貴重な資料であるといえる。

尚、当該資料は、木村牧氏の孫に当られる木村宏氏が、2012年9月に当センターにご来訪の上、寄贈してくださったものである。



¹ 『青森県教育史 第一巻』青森県教育史編集委員会編、1970年。

² 以下、特約生教育学科については『御雇教師ハウスクネヒトの研究』寺崎昌男ほか著、1991年。

³ 明治22年9月以降、入学時期の違うものを含めると修了者は12名。この中には谷本富や本庄太郎、稲垣末松などその後の教育界を担う人物が含まれている。

田端重晟関係史料について

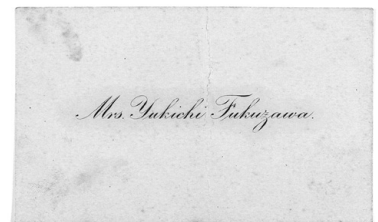
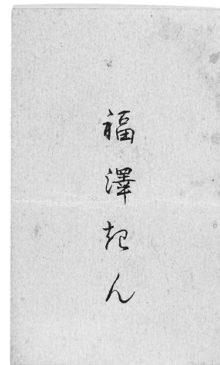
福沢研究センター研究嘱託 堀 和 孝

福沢研究センターの西沢直子教授とともに、整理を依頼されていた田端重晟関係史料を返却するため埼玉県比企郡小川町の田端節子氏（重晟の孫。弟の渡辺隆一氏は元本塾大学の数学教師）宅をお訪ねしたのは、昨年12月2日のことだった。田端氏のお宅を訪問するのは、3月26日にこの史料を拝借するために西沢教授とうかがって以来、約八ヶ月ぶりのことである。前回は平日だったので都内の道路が少し混んだが、この日は日曜日であるため車が少なく、三田を出発して二時間余りで小川町に到着することができた。

田端重晟は、1864（元治元）年4月、武蔵国比企郡小川町（現・埼玉県比企郡小川町）に生まれ、明治16（1883）年10月に慶應義塾に入学、21年7月に別科を卒業している。福沢諭吉の二女房と結婚した岩崎桃介と親しかったことから学生時代より福沢家に入出入りし、ときに福沢の原稿の清書をすることもあった。卒業後は、桃介とともに北海道炭礦鉄道会社で勤務していたが、26年に北里柴三郎が結核専門病院養生園を東京白金に設立するに当たり、福沢に請われて同園に移っている。福沢が、養生園を家族や知人の医療のためだけでなく、家庭内での宴会の準備や朝鮮政客の隠匿などさまざまな目的で利用したことは数々の田端宛書簡が物語る通りであり（明治27年9月28日付、11月3日付、28年7月17日付、7月28日付など）、自ずと同園の事務と経営を担う田端は福沢の秘書に近い役割を果たすこととなった。さらに北里が大正3年に北里研究所を設立するとその事務長も兼務している。田端が明治21年から昭和17年にかけてつけていた日記は北里研究所に保存され、福沢や北里の身边を伝える貴重な史料として知られる。昭和20年2月12日死去。

今回お預かりした史料のなかで主だったものを挙げると、田端重晟の使用した財布、福沢錦（諭吉の妻）の名刺、房の描いた日本画、北里研究所の設立に関する田端の書簡などがある。これらのうち、最も高い価値が認められたのが錦の名刺であった。表面には「福沢きん」と縦書きで書かれ、裏面にはローマ字で「Mrs. Yukichi Fukuzawa.」と記されている。今日でこそ自分の名刺を持つ女性は珍しくなくなったが、錦は夫だけではなく妻も自分の名刺を持つべきだと考えてこれを作成したのだろうか。錦は自ら主人となりそれまで交際の機会がなかった婦人たちを七、八十人ほど招待する会を自宅で開くこともあったので（明治18年3月30日付福沢一太郎宛福沢諭吉書簡）、実際に名刺が必要となることもおそらくあったのだろう。それにしても、裏面のローマ字の表記が「Mrs. Kin Fukuzawa.」ではなく、「Mrs. Yukichi Fukuzawa.」となっているところが当時の雰囲気伝えて面白い。

昨年3月に初めてお訪ねしたときの田端家は、母屋と同じ敷地内に機械工場があり、周囲には水田が広がる農村地帯のなかにあったが、今回はそこから数百メートル離れた新興住宅地帯の一角に新築されていた。真新しいお宅で川越の銘菓をいただきながら、ご子息の晴彦氏も交えて四名でしばらく歓談し、帰路についた。帰りの道も順調に流れていたが、関越道の電光掲示板に中央道は事故のため通行止めと表示されているのが運転しながら気がかりだったが、特に天候が悪いわけでもないのにどうしたのかと思ったが、それが笹子トンネルの崩落事故と知ったのは、田町駅前レンタカーを返却し自宅に向かう電車のなかであった。今回はたまたま方向が違っていただけだったが、もし関越道ではなく中央道を走っていたら大変なことになっていただろう。念のため、山梨に住む知人の安否を電子メールで確認し、その日は床についた。



福沢研究センターでは、2008年度より慶應大阪リバーサイドキャンパスにおいて、連続公開講座を行ってきました。初年度は、『『学問のすすめ』を読む』をテーマに全5回（米山光儀・岩谷十郎・宮内環・都倉武之・西沢直子）、2009年度は「近代日本と福沢諭吉」をテーマに、途中大阪市美術館で開催されていた「未来をひらく福沢諭吉展」の見学会をはさみながら全7回（米山光儀・都倉武之・樽井正義・岩谷十郎・平野隆・小室正紀・坪川達也）、2010年度は「福沢諭吉とその時代―慶應義塾創始者・福沢諭吉、大阪で生まれて175年」をテーマに全6回（米山光儀・有末賢・池田幸弘・井奥成彦・小野修三・西沢直子）の講座を行いました。2011年度は、福沢研究センター所員がオムニバスで担当する方式を変え、講師を客員所員の甲南大学法学部教授安西敏三氏にお願いし、全4回で『『文明論之概略』を読む』がテーマでした。福沢の著作のなかでも、知識層を読者対象に書かれた『文明論之概略』は、ひとりで読み進むには根気を要し、適切な解説を受けながら読書会を行いたいという、それまでの受講者の方々のご希望によるものでした。

本年度は『『福翁自伝』を多角的に読む』をテーマに、客員所員の関西大学経済学部浜野潔教授と四天王寺大学教育学部曾野洋教授にも出講を依頼し、全5回（他に西沢直子・米山光儀・小室正紀）で開講しました。大阪リバーサイドキャンパス事務室の小崎由紀子さんのご尽力により、近年では受講者も毎年50名ほどに達し、最終回には茶話会を行って、受講者と講師との交流を深めています。今回受講者のおひとり、大阪慶應倶楽部の副会長でもいらっしゃる重田勇さんに感想をお書きいただきました。

福沢研究センター講座を受講して

昭和34年法学部卒 重田 勇

慶應大阪リバーサイドキャンパスで開催される講座に殆ど出席しています。なかでも福沢研究センターの講座は、福沢先生の著作を紹介するにあたって、毎回工夫を凝らして馴染みやすく解説されています。お蔭さまで受講生は授業に引き込まれて、あっという間に二時間が経ってしまいます。

先生の著作は莫大なボリュームなのでボケ老人にはどこから手をつけたらいいのか、五里霧中でしたが、生徒が興味をもつように、講師先生方が実に巧みに福沢ワールドへ誘って下さいます。福沢思想の理解に向かって、ほんの入口に立ったところですが、それでも胸が躍るような気持で教室に入ることが出来るのはしあわせです。こんなことなら学生時代にもっと勉強しておけばと、後悔しきりです。でも残り少ない時間に際して、間に合ってよかったと思っています。

「老にして学べば、則ち死して朽ちず」（言志晩録）死んでもその名は朽ちないように努力しなければなりません。

西沢直子教授の講座で、「襖の下張り」を教わりました。永井荷風の話か、と一瞬期待したのですが、学生たちと中津の福沢旧宅で襖の下張りに使われていた古紙を、ていねいに剥がして、そこに書かれている文字や数字を読み解いているとのことでした。気の遠くなるよう

な根気を保って、先生の育った時代背景をいまなお研究を続けられていることに感銘を受けました。歴史を繙くには、考古学的な作業もあることを知りました。

学祖の全てを徹底して掘り起こすという地味な研究を、エンドレスで続けているセンターがあることは珍しいことだと思います。福沢精神を永遠に伝えることは、日本のバックボーン形成につながると信じています。

他大学出身の友人から「慶應OBはよく群れる」と言われます。海外も含めて830の三田会が躍動していることを、どのように説明しても理解されません。福沢研究センターのお蔭で、単に群れるのではなく、学ぶために群れているのです。

慶應大阪キャンパスがリバーサイドからシティに移ります。学ぶことのよろこびを、ますます広めて下さるよう期待しています。



『慶應義塾 150 年史資料集 第 1 巻』刊行にあたって

福沢研究センター教授 西 沢 直 子

慶應義塾は、2008年に創立150年を迎えた。それに先立ち福沢研究センターでは、1996年から記念として何を出版するかについての話し合いを進めて来た。『慶應義塾百年史』全6巻を刊行してから50年が過ぎ、当然『百五十年史』をという声もあがった。しかし大部な『慶應義塾百年史』と同じ密度でその後の50年を描くには、典拠とする資料の収集および整理が不十分であった。その理由として、ひとつには慶應義塾という組織がどんどん拡大し、全体を把握することが困難になっていったことと、一方で1960年代から90年代までは、まだ教職員ともに大学アーカイブスに関する認識が低かったことが挙げられる。そこで記念出版物は、将来の『二百年史』執筆を見据えて、基礎的な資料やデータの収集整理を目的に、『慶應義塾150年史資料集』を刊行するという結論に達した。

まず別巻として、創立イベントの年である2008年に『慶應義塾史事典』、福沢生誕175年の2010年に『福沢諭吉事典』という2つの事典を刊行した。両書を通して慶應義塾史を俯瞰したうえで、基礎資料編から始まる本編を開始することにした。そして昨2012年10月に、本編第1巻『塾員塾生資料集成』が刊行の運びとなった。

『塾員塾生資料集成』は、入学時の記録である「慶應義塾入社帳」(以下入社帳、文久3年～明治34年)と、成績表にあたる「慶應義塾学業勤惰表」(以下勤惰表、明治4年～31年)、卒業生名簿の「慶應義塾塾員姓名録」(以下塾員名簿、明治23年～)という3つの資料(いずれも年代によって、その名称に多少の相違がある)を利用して、個人別に名前、出身地、身分、保護者、保証人、保証人の身分・住所、在籍の課程、判明する履修科目、卒業後の職業、住所、原籍などのデータを掲げたものである。入社帳記載者はのべ15,401名に至り、勤惰表のデータ数は1人1学期分のデータを1件として66,405件、塾員名簿は1人1年分のデータを1件として明治44年発行分までで30,007件になった。編集を開始した当初は、明治期分だけでもデータのマッチングをしたいと考えたのだが、予想をはるかにこえて、入社帳には記載がないのに勤惰表や塾員名簿には名前が出てくる人物が現れ、また後述のように誤植も多いことから、改姓した同一人物や同姓同名の別人を見極めることが困難な作業となった。そこで今回は、福沢が築地鉄砲洲の中津藩中屋敷内で蘭学を教え始めてから25年間分、すなわち明治16年末までに入学した人物を対象とした。対象となった人物は実数で、4940人である。

もともとなった資料は、すでに『マイクロフィルム版福沢関係文書』(雄松堂フィルム出版、1989～98年)で公開されているものではあるが、1人の人物について、入学時、在学時、卒業後のすべての情報を得ようとすると、

これまでは大変な作業であった。入社帳は癖のあるくずし字も多く、基礎となるデータでありながら、何通りかの読み様が考えられる人物も出てくる。勤惰表は、在籍するすべての学生の成績が、成績のよい順に印刷されているので、名前を探す術がなく端から見ていくしかない。ある学期分を見つけると、次はその前後の等級のことが多いが、在籍するコースそのものを変える場合もあれば、一時的に中断する場合もある。塾員名簿はイロハ順ではあるが、たとえば梅田は「ウ」のことも「ム」のこともある。そして勤惰表も塾員名簿も、非常に誤植が多い。「次郎」の「次」の字が「治」や「二」に異なるくらいは何とかなるが、「三郎」や「四郎」になっていると兄弟の可能性も出てくる。見た目で「土方雄志」が「立方雄志」と印刷されていたりもする。

今回は各資料のデータをエクセルに入力し、PCで名寄せ作業を行った。その結果3つの資料のデータを一覧できるように、かなり便利になったと思う。しかしながら、家督の関係などで今より頻繁に改姓も行われ、前述のように同一人物の判定は複雑で、またエクセルが膨大な文字データの処理に適していなかった部分もあるのでミスも多々あると思う。ぜひ多くの方々に使っていただき、より正確でより便利なものに改訂できればと願っている。



377——岩崎 虎太郎		380——岩崎(改姓:福沢) 桃介	
a. 土佐国高知県 b. 土佐郡高知町内帯屋町 c. 土族 f. 岩崎長武・長男 g. 慶応2年12月 i. 山内正直(土族) j. 府下牛込区牛込南町 k. 明治14年4月8日 l. 次丁表に記載あり m. II 373		a. 埼玉県 b. 入間郡川越本町 c. 平民 f. 岩崎紀一・次男 h. 14年5ヶ月 i. 真野親我 j. 東京芝虎門前 k. 明治15年10月5日 m. II 520	
n.		年・月	
等 級		等 級	
159-12	子科 / 番外ノ二、漢字科 / 甲組ノ二	159-12	子科 / 番外ノ二、漢字科 / 甲組ノ二
161-4	子科 / 番外ノ一、漢学大試業 / 乙組	161-4	子科 / 番外ノ一、漢学大試業 / 乙組
165-7	子科 / 四番ノ二、漢書大試業 / 乙組	165-7	子科 / 四番ノ二、漢書大試業 / 乙組
169-12	子科 / 三番、子科 / 四番之一	169-12	子科 / 三番、子科 / 四番之一
171-4	子科 / 二番	171-4	子科 / 二番
175-7	子科 / 一番	175-7	子科 / 一番
179-12	本科 / 四等	179-12	本科 / 四等
185-7	本科 / 四等	185-7	本科 / 四等
189-12	正科本科 / 四等	189-12	正科本科 / 四等
191-4	正科本科 / 二等	191-4	正科本科 / 二等
195-7	本科 / 一等	195-7	本科 / 一等
199-12	本科 / 一等	199-12	本科 / 一等
378——岩崎 直国		0.	
n.		年	
等 級		職 業	
145-7	科外 / 丙組	明治34	太三商店員
		明治35	北海道炭礦鉄道株式会社幹事
		明治38-39	北海道炭礦鉄道会社員
		明治40-43	会社員
		明治44—大正1	日本瓦斯株式会社 其他陸会社重役

新収資料紹介

平成24年9月から平成25年2月までの間に、福沢研究センターに収蔵された主な資料を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながら、すべての資料をご紹介することができず申し訳ありません。(物故者敬称略)

福沢諭吉関係資料

■ 漢詩「中外風光与歳遷 往時回顧渺無辺 屠蘇先祝乃翁寿 六十二年如万年 乙未元旦」 1幅

【岩崎清昭氏 岩崎興三氏 岩崎佳夫氏 岩崎清武氏 吉川いそ氏 藍沢千代子氏寄贈】

乙未は明治28(1895)年。福沢は前年に日清戦争勃発のため、還暦祝賀宴を延期していた。書幅の旧蔵者は、大正7(1918)年卒業の岩崎清一郎。清一郎は、明治17(1884)年3月に入塾した岩崎清吉(のち清七と改名)の長男。清吉は栃木県藤岡の出身で醤油製造業や廻米問屋を営み、磐城セメント社長も務め、雑穀取扱商岩崎商店(現岩崎清七商店)を創業した。福沢の長男次男のアメリカ留学中にニューヨークに留学しており、福沢の書簡にも登場する。

この書幅は横浜市長や衆議院議員を務めた平沼亮三(31年大学部理財科卒)が、慶應義塾柔道部師範飯塚国三郎に新築祝として贈ったもので、その後飯塚家の世話をした柔友会(柔道部OB会)会長の清一郎に、お礼として贈られた。

■ 福沢諭吉自筆時事新報社説原稿「株熱の余症恐る可し」 明治26(1893)年7月27日付 1巻

【同上】

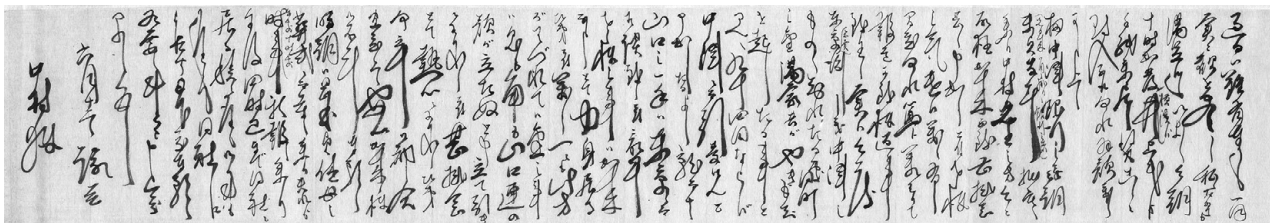
好景気で株価が上昇したため、民間に売却目的での株式購入熱が高まっていることを憂い、破綻の危険性を述べたもの。犬養毅による題辞「精銳百鍊」および箱書「是先師福沢先生手書稿本也 先生真跡甚稀其永宝之」がある。

この原稿は、長野出身で明治14(1881)年3月に慶應義塾に入学、20年卒業後は時事新報や三井銀行、王子製紙に勤務、衆議院議員も務めた鈴木梅四郎の旧蔵品。台南製糖の清算に尽力した岩崎清七が、謝礼として譲り受けた。

■ 中村道太宛福沢諭吉書簡 明治20(1887)年カ6月12日付 1通

【購入】

書簡の内容は、中津銀行への出資を急ぐよう依頼するもの。名宛人の中村道太は福沢の慶応2(1866)年以後の友人で、明治13年には横浜正金銀行を設立して、初代頭取に就任した。この書簡で出資を促している中津銀行は、おそらく第七十八国立銀行で、11年に旧中津藩士族たちが金禄公債を原資として設立したが、その後株主が減少、21年には東京八王子に移転した。通常中津銀行は、士族たちの互助組織である天保義社が改組した株式会社中津銀行を指すが、ここでは内容から考えて第七十八銀行と判断した。福沢は他の書簡でも同行を中津銀行と呼んでいる。



■ 加藤弘之宛福沢諭吉書簡 明治14(1881)年2月2日付 1幅

【購入】

内容は、学士会院からの「除名」を申し出た福沢に対する慰留を、さらに断ったもの。退会の理由は、文部省より学士会院会員が受け取っていた年金300円について、福沢が250円を会院の積金とし利子を後進に役立てることを提言したが、賛否両論が起り不採用となったことや、福沢と懇意だった田中不二麿が明治13年3月に文部省から転出させられたことによると推測されている。加藤は『福翁自伝』にも登場する旧幕時代からの知人で明六社仲間でもあるが、民撰議員設立や学者職分論をめぐる対立した。発信年は、福沢が13年12月4日に、会長西周に対し会員を辞す願書を提出していることから、翌14年2月と推測される。

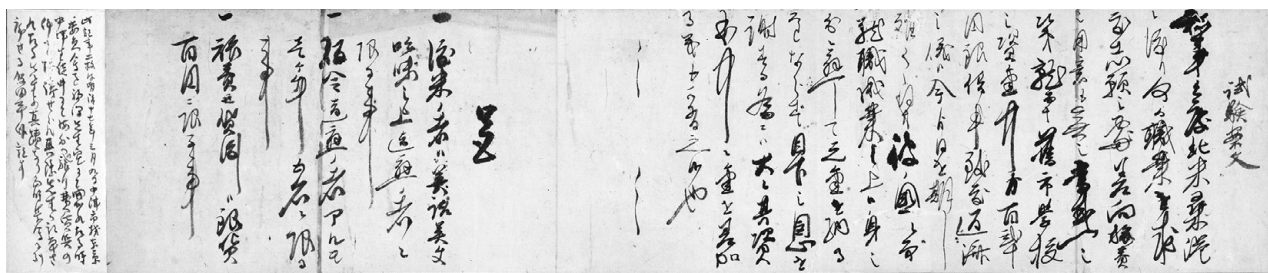
■ 〔旧中津市学校資金よりの海外渡航費貸与に関する覚〕 1幅

【購入】

中津市学校は明治4(1871)年11月に、福沢諭吉の提言を受け、旧藩主奥平家と前述の天保義社からの拠出金により、設立された洋学校。学則・カリキュラムは原則として慶應義塾に準じ、主な教職員は慶應義塾から派遣された。明治10年頃までは順調に発展したが、その後経済状況の悪化や他校の成長などにより学生数が減少し、12年には福沢をはじめ中津出身者20名で「事務委員会集会」を組織、資金の有効運用のための改革を図った。この資料はその会議の席上、海外渡航費援助の案件が出た際に、福沢が認めた願書の案文と貸与に関するルール覚の覚。16年1月24日の会合で閉校が決定していたが、今回の資料から閉校後も資金の使途が協議されていたことが想像される。この資料には飯田平作

による次のような説明文が添えられていた。飯田平作は福沢と縁戚関係にある中津藩士で、慶應義塾出版社で『民間雑誌』などの発行に尽力。また三田豊岡町で養鶏を始め、成功を収めた。

「此記事二枚は、明治十七年三月九日、中津市校東京委員会を福沢先生宅にて開かれたる時、中津生徒中にて海外への旅行費貸与の件を協議せられ、其際先生か記草されたる先生の真蹟なり。当時集会に列席せる飯田平作記す」



慶應義塾関係資料

■ 中村孝太郎旧蔵資料 22点

【中村誠一氏寄贈】

中村孝太郎は昭和10(1935)年文学部卒。昭和6～8年の折口信夫教授芸能史、8年の小泉信三教授社会問題の授業ノートなど授業ノートや蔵書など。

■ 小林重雄旧蔵資料 52点

【個人よりの寄贈】

小林重雄は法学部教授。昭和15年度から52年度まで慶應義塾で教鞭をとった。戦時中に恩師である西脇順三郎の蔵書も預かっており、西脇の日記や西脇の名前が書かれた木札、慶應義塾から同人宛の連絡状なども含まれている。

正誤訂正 前号で紹介した後藤象二郎宛福沢諭吉書簡の発信年月日を、明治17年カ9月27日付から明治20年カ9月27日付に訂正します。前号では武藤山治の改姓時期から明治17年ではないかと推測しましたが、和田守氏より武藤の自伝『私の身の上話』(武藤金太発行、昭和9年)中「後藤伯の大同団結と私」の中で、2人の出会いが明治20年になっているというご指摘を受けました。内容的にも矛盾がなく、福沢が姓に無頓着な例はほかにも見られるので、ほぼ20年であろうと思われます。和田氏のご教示に深く感謝申し上げます。

主な動き

■ 所長の交代

米山所長が2012年9月末日をもって2期4年間の任務を終了、10月1日より法学部の岩谷十郎教授が新しい所長に就任した。岩谷教授は商学部の平野教授とともに長年にわたり副所長を務めてきたが、今回の所長就任にあたって、専任所員の西沢直子教授が副所長に就任した。

■ 講演会の開催

今年度も福沢諭吉協会と共催で10月6日(土)に講演会を開催した。東京大学大学院総合文化研究科教授のロバート・キャンベル氏をお招きし、『『福翁自伝』から読み解く幕末維新期の日本』というテーマで講演をいただいた。通常は演説館で実施されるが、今回は大教室の西校舎519番に会場を変更、満席となって盛況であった。

■ 大阪での福沢研究センター講座

今年度も大阪リバーサイドキャンパスにおいてセンター講座を開講した。『『福翁自伝』を多角的に読む』というテーマで10月13日(土)から2月2日(土)まで5回にわたる講義を行った。なお、リバーサイドキャンパスは、JR大阪駅・

阪急梅田駅に近いグランフロント大阪に移転、名称も慶應大阪シティキャンパスに改まって5月下旬に再開となる予定(P.6, 11参照)。

■ 出張による資料調査

今年度も10月18日(木)～20日(土)、3月18日(月)～21日(木)にかけて、長野県安曇野市において上原家が所蔵する資料の調査を行った。また、2月28日(木)～3月2日(土)にかけて、山形県立図書館において池田成彬に関する資料調査を行った。

■ 『慶應義塾150年史資料集』第1巻の刊行

2012年3月に刊行を予定していた資料集第1巻『塾員塾生資料集成』は、最終校正に予想以上の時間がかかり、10月末の刊行となった(P.7参照)。

■ 訃報

1月22日(火)、服部禮次郎君(元評議員・理事・監事、慶應連合三田会会長)が逝去された。義塾のみならず、センターの事業にも多大なるご尽力をいただいた。また、2月23日(土)にセンター顧問で、元所長の河北展生君が逝去された。『『福翁自伝』の研究』など、福沢研究にも大きな業績を残している。お二人のご冥福をお祈りしたい。

■ 空襲直後の三田の写真みつける

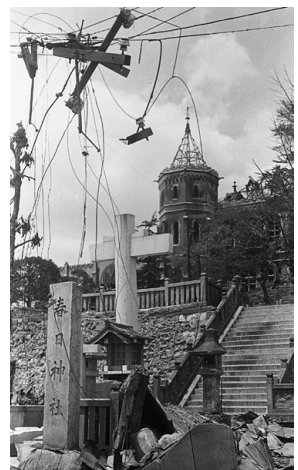
当センターでは昨年、東京大空襲・戦災資料センター（東京都江東区）が所蔵する慶應義塾三田校舎の空襲被害を撮影した写真画像のデータ提供を受けた。撮影者は「東方社」所属カメラマンで、同社は陸軍参謀本部の下で昭和16年に設立された国策宣伝会社である。写真の撮影日は不明だが、昭和20年5月25日深夜から翌日未明にかけての三田の空襲被害を、被災から間もなく写した37枚からなり、「幻の門」や図書館の周辺、全焼した考古学教室（現在体育会本部のある西館の位置）周辺の二つのまとまりをなす。同じ顔ぶれが坂を上っていくところと下っていくところの両方を写した写真が含まれることから、記録写真ではなく、構成写真（やらせ）と推定される。

従来センターが所蔵していた空襲被害の写真は、被災からかなり日が経過した後、恐らく終戦後のもので、焼け残った建物の煤やがれきが、比較的きれいになってしまっている。今回の写真では建物内部が炎上して窓から炎が吹きだした跡を図書館の壁面にありありと見て取ることができ、隣接する春日神社の鳥居の足1本が十字架のように残っている様子なども写りこんだものがあり生々しい。また「幻の門」は、中央側の2本の石柱が根元から切断された痛々しい姿が写っている。戦時中に車両入構のために切断されたという証言と合致する。無残な姿の図書館を背後に、塾監局前の銀杏周辺で塾生が本を開いて談笑している写真などは、空襲に動じず平穏に生活する日本の学生をアピールする意図で撮影されたものだろうか。興味深いのは、考古学教室の焼け跡で学生や教員らしい人物たちが発掘品を探している写真が15枚も含まれていることである。これらは文学部民俗学考古学研究室に検討をお願いしている。

戦時下の義塾については資料が乏しく、引き続き収集に努めたい。



石柱2本が無い幻の門付近



春日神社の一本足の鳥居



福沢邸跡地付近より図書館を望む



ポーズを取る塾生たち



考古学教室の焼け跡

写真：東方社撮影、東京大空襲・戦災資料センター提供

■ 塾員河原一慶氏収集、小泉信三関係資料ほか約100点の寄贈

2008年に200点近い収集資料をご寄贈いただいた河原一慶氏（平9政卒）から、その後の収集資料98点の追加寄贈があった。河原氏は古書店の目録、店頭、インターネットオークションで日頃より小泉信三関係を中心に慶應義塾関係の資料を幅広く収集されている。

今回は吉田小五郎（黒船館）旧蔵と思われる資料が多数含まれ、塾史上重要な文書である小泉信三「塾の徽章」（昭和14年）の自筆原稿、吉田小五郎への献辞がある『海軍主計大尉小泉信吉』などもある。小泉家の親族が交わした往復書簡およそ30通は、1点ずつ古切手のオークションに出ていたものを、丹念に集められた（残念ながら入手できなかったものも少なくないという）。

河原氏の寄贈品はご本人やご縁者の旧蔵品ではなく全て収集されたものである点で、当センターにおいては希有なコレクションで、地道なご努力とご厚意に改めて感謝申し上げたい。

■ 諸会議

- * 平成24年度第2回執行委員会(10月23日)
- * 平成24年度第3回執行委員会(12月4日)
- * 平成24年度第4回執行委員会(3月7日)
- * 平成24年度福沢研究センター第2回運営委員会(11月6日)
- * 平成24年度福沢研究センター第3回運営委員会(3月13日)
- * 平成24年度第2回福沢研究センター会議(12月20日)
- * 小泉基金運営委員会(1月24日)
- * 『近代日本研究』第30巻第1回編集会議(3月13日)
- * ワークショップ(近世近代研究交流会と合同開催)(3月23日)
「木下鞆村とその周辺―天保期文会について―」
報告者: 片岡浩毅氏(早稲田大学大学院博士課程)
「村田保文書にみる旧刑法「親属例」成立の経緯」
報告者: 三田奈穂氏(中央学院大学法学部非常勤講師)

■ 人事

- 〈所長〉 新任 岩谷十郎(法学部) 10月1日～
- 〈副所長〉 新任 西沢直子 10月1日～

■ 主な来往

- * 韓国 KBS の取材(10月26日)
- * 元フランス国立科学研究所教授ジョセフ・キブルツ氏、福沢の写真の件で来訪(12月6日)
- * 宮内庁書陵部内藤一成氏来訪(12月14日)
- * 韓国啓明大学校金明洙(キムミョンス)氏ほか見学(1月17日)
- * 梨花女子大学の菅原百合氏来訪(1月25日)
- * 麗澤大学櫻井良樹氏来訪(3月18日)

■ 出張・見学

- * 酒井事務長、清野主務、全国大学史資料協議会総会(10月10日～12日)
- * 西沢教授、福沢旧邸保存会評議員会出席のため中津(10月17日、3月28日)
- * 都倉准教授、吉岡研究嘱託、横山調査員、中村調査員、亀岡敦子氏、上原家調査のため長野県安曇野市(10月18日～20日、3月18日～21日)
- * 西沢教授、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会出席のため広島(11月8日～9日)
- * 西沢教授、清野主務、全国大学史資料協議会の研究会・講演会に参加のため東海大学(12月13日)
- * 岩崎顧問、米山前所長、都倉准教授、柄越非常勤嘱託、山根調査員、資料集第2巻の調査のため幼稚園(2月27日)
- * 都倉准教授、横山調査員、池田成彬資料の調査のため山形県立図書館(2月28日～3月2日)
- * 西沢教授、韓国女性史学会出席のためソウル淑明女子大学ほか(3月14日～17日)
- * 岩谷所長、福沢旧邸保存会理事会、西沢教授、同評議員会出席のため中津(3月28日)

■ 講師派遣

- * KORC(慶應大阪リバーサイドキャンパス)センター講座
第1回 西沢教授:『『福翁自伝』の成立と中津時代の福沢論吉』(10月13日)
- 第2回 浜野潔氏(関西大学教授、客員所員):「福沢論吉と大阪 家族・学問・商才」(11月24日)
- 第3回 曾野洋氏(四天王寺大学教授、客員所員):「福沢論吉と教育ベンチャー―西洋流の一手販売―」(12月15日)
- 第4回 小川原准教授(所員):「老余の半生」の「大笑ひな

珍事」―明治十四年の政変をめぐる―(1月19日)

第5回 小室教授(所員):「晩年の福沢論吉」(2月2日)

- * 都倉准教授、日吉キャンパス公開講座「日本ってなんだろう?」にて「福沢論吉の見た日本の長所と短所」と題して講演(10月27日)
- * 西沢教授、北京社会科学院および南開大学日本研究員共催シンポジウムにて「福沢論吉の女性論と慶應義塾における女子教育」と題して研究報告(10月28日)
- * 米山前所長、福沢論吉記念第51回全国高等学校弁論大会にて審査員(12月7日)
- * 都倉准教授、アートセンター・横浜市主催のセミナー「日吉の近代建築」で基調講演「近代建築の保全と活用の未来―慶應義塾日吉寄宿舎を例として―」(12月8日)
- * 西沢教授、船橋市男女共同参画センターにて「福沢論吉の女性論から学ぶ男女共同参画」と題して講演(12月11日)
- * 都倉准教授、SFC 高等学部説明会にてキャンパスの歴史を説明、柄越非常勤嘱託、堀調査員、施設の説明(12月18日)
- * 都倉准教授、通信教育部説明会で「慶應義塾という思想」と題して講演(12月22日)
- * 加藤幼稚園舎長(所員)、福沢先生誕生記念会にて「福沢先生と子ども、そして幼稚園舎」と題して講演(1月10日)
- * 西沢教授、東京雄学大学にて「福沢論吉の女性論・家族論」と題して講演(1月24日)
- * 都倉准教授、慶應倶楽部で「福沢論吉の服装をめぐる」と題して講演(1月28日)
- * 都倉准教授、通信教育部入学説明ビデオ「慶應義塾という思想」収録(1月31日)
- * 岩谷所長、幼稚園にて『『よい』ことと『ただしいこと』―“空気”の読めなかった福沢先生―と題して講演(2月2日)
- * 米山前所長、東京通信三田会創立45周年記念行事にて講演:福沢論吉の「廃塾」の意向とその後の展望(2月2日)
- * 岩谷所長、福沢論吉先生113回忌法要時記念講演会で「自我作古の人と思想―福沢論吉の始まり」と題して講演(2月3日)
- * 西沢教授、都倉准教授、学生部職員に講義(2月4日、8日)
- * 西沢教授、杉並三田会知的好奇心の会にて「福沢論吉と女性」と題して講演(2月23日)
- * 都倉准教授、町田三田会で「福沢論吉ミニレクチャー」(3月5日)
- * 都倉准教授、日吉地下壕保存の会主催公開講演会で「慶應義塾の寄宿舎からみえる日本近代の一側面」と題して講演(3月9日)
- * 坂井名誉教授(元所長、顧問)、中津にて「草創期のビル・ブローカー奥山春枝の生涯と意見―慶應義塾の歴史が忘れていたある福沢門下生―」と題して講演(3月27日)

■ 訃報

- * 慶應連合三田会会長 服部禮次郎君逝去(1月22日)
- * 名誉教授、元所長、センター顧問 河北展生君逝去(2月23日)

■ その他

- * 篤志家から研究資金としてセンターに指定寄付(2月19日)
- * 磯野不動産株式会社より三笠ホテル・中央亭関係資料の寄贈(3月7日)
- * 三田から日吉西別館に資料を搬送(3月11日)

スタッフ一覧

所 長	岩谷 十郎	法学部教授	川崎 勝	
副 所 長	平野 隆	商学部教授	佐藤 正幸	山梨大学教授
専任所員	西澤 直子	副所長、福沢研究センター教授	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
	都倉 武之	福沢研究センター准教授	進藤 咲子	東京女子大学名誉教授
所 員	池田 幸弘	経済学部教授	曾野 洋	四天王寺大学教授
(兼運営委員)	小野 修三	商学部教授	高木 不二	大妻女子大学短期大学部教授
	小室 正紀	経済学部教授	西田 毅	同志社大学名誉教授
	澤田 達男	理工学部教授	浜野 潔	関西大学教授
	武林 亨	医学部教授	平石 直昭	帝京大学教授
	林 温	文学部教授	平山 洋	静岡県立大学助教
	山内 慶太	看護医療学部教授	藤原 亮一	田園調布学園大学教授
	米山 光儀	教職課程センター教授	前坊 洋	
所 員	有末 賢	法学部教授	松沢 弘陽	立教大学教授
	井奥 成彦	文学部教授	松田宏一郎	成蹊大学教授
	大久保忠宗	普通部教諭	宮村 治雄	
	太田 昭子	法学部教授	森川 英正	
	大塚 彰	志木高等学校教諭	山田 央子	青山学院大学教授
	小川原正道	法学部准教授	林 宗元	韓国関東大学校名誉教授
	加藤 三明	幼稚舎長	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	Knaup, Hans-Joachim	経済学部教授	Saucier, Marion	フランス国立東洋言語文化大学教授
	斎藤 暁子	女子高等学校教諭	Nguyen thi Hanh Thuc	
	末木 孝典	高等学校教諭		
	樽井 正義	文学部教授	研究嘱託	田中 康雄
	Ballhatchet, Helen	経済学部教授		金 眞瑠
	宮内 環	経済学部准教授		巫 碧秀
				三島 憲之
顧 問	岩崎 弘	元幼稚舎教諭		石井寿美世
	小泉 仰	名誉教授		吉岡 拓
	坂井 達朗	同		堀 和孝
	佐志 傳	元高等学校教諭		坂井 博美
	寺崎 修	名誉教授		山根 秋乃
	中村 勝己	同		柄越 祥子
	松崎 欣一	名誉教諭		
客員所員	安西 敏三	甲南大学教授	事務局	酒井 明夫 事務長
	飯田 泰三	島根県立大学副学長		清野 早苗 係主任
	井田 進也	大妻女子大学名誉教授		高嶋 朱里 嘱託
	區 建英	新潟国際情報大学教授		池上 瑠菜 同
	掛川トミ子	関西大学名誉教授		印東 史子 派遣職員
	片岡 豊	白鷗大学教授		柄越 祥子 非常勤嘱託
	我部 政男	山梨学院大学教授		

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、18名
(3月31日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第18号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2013年3月31日 (年2回刊)
編集 慶應義塾福沢研究センター
発行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1603
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印刷 (有) 梅沢印刷所